

Kの世界に2019年度の基調の分析を頼まれたとき、正直気が重かった。書き始めても中々筆が進まない。最近、文章を書く時、特に京生研に関わって文章を書かせてもらうときにはそうなる。「Kの世界」は本当に素晴らしい機関誌だと思う。自分が例えば自分史を書いたとして、果たして今までの先生達のようにこんなにも「濃い」人生史が書けるだろうか。滝花先生の文章が好きで掲載される度にまず読むのだが、先生の文章は控え目で、慎重に言葉を吟味しながらなのに、最後には大きなパッションを与えられる文章で圧巻させられる。自分にはそんなことが書き示せる力量や人に言える実践が無い。そんな事を「Kの世界」を読み、みなさんの実践や経験、その思想性に触れる度に感じてしまう。残りの自分の教師人生を考えた時に、後どれほどの上積みが自分にあるのだろうか。少しはやすぎるかも知れないがそのようなことを人との比較でつい考えてしまう。そうすると40を手前にして、すでに自分の力量の高が知れてるような気がする。このような自覚を持ったまま文章を書くと、どうしても周りからの自分の能力を見透かされた評価を恐れてしまい、文章が書けなくなる。書けてもかっこつけた文章というか、偽った文章というか、なんだか自分の書いた文章ではないような気がしてしまう。だから書くことを躊躇するのだ。そんな感覚はこの数年ずっとあって、それは研究部長として基調を書くことを任せられたあたりから強くなり始めたかもしれない。振り返ると基調を書くという作業は、自分の文章で何を書くかという力量に向き合う作業だった。

今年度の基調に至るまでのことをかなり頑張っただけで少々書かせてもらう。高が知れている自分のことも隠さずに書いてみよう、そう思うと文章を書くのも少し楽な気持ちになったからだ。

2016年度から3年間基調を研究部長として書いた。最初、その荷の重さと重圧に押しつぶされそうだった。自分に何が書けるだろうか。「基調」とは「思想・行動・学説などの根底にある基本的な考え」のことである。自分が京生研のそんなものが書けるのだろうか。無茶な話である。しかし、仕事・役割が人間を作るとサークルや学習を通して教えられてきた。また、「思想・行動・学説」を提案しなければならないから、基調を書く人間がその制作過程で、一番それを理解しようとしなければならないし、産み出そうとしなければならないので一番の学びが得られることも分かっていた。研究部長であったこともあるが、高が知れそうな自分にとって、基調に携われる条件がある以上、書くという一択だった。

2016年基調は、2015年が牧本先生の「若い教師へのエール」に答える形で、若い教師達の今の声、特に「苦悩」を形にしようと執筆した。これは大変書きやすかった。学習会などに参加しても聞こえてくるのは若い教師の苦悩である。その苦悩の原因とどう対峙するかをみんなの声を拾いながら「今の若者はこうなんだ！」と書いた。苦悩を出発点として、「Kの特定・学級自治・職場作り・仲間を増やす」ことでその苦悩を越えようという組み立てだ。若い先生の声を代弁しているので、一定の共感を特に若い先生から得

ている感触があった。

しかし、その京生研大会での議論の中で「この基調は情緒的だ」という指摘があった。情緒とは「事に触れて起こるさまざまな微妙な感情。その感情を起こさせる特殊な雰囲気」のことである。さまざまな微妙な感情を抱かせるような雰囲気がこの基調にはあるという。特に批判を含んだ発言ではなかったと記憶しているが、私は何故か鋭い指摘をされたように受け取り心が揺らいだ。情緒で何が悪い、若い教師の苦悩、気持ちを代弁して書いたのだ、気持ちが大事だろ、と心の中で複雑な感情が渦巻いた。そして、この情緒的という指摘が批判をされたわけでもないのに、その後も尾を引いて引っかかり続けた。おそらく無意識的にこの指摘が目を向けたくないものだったからだろう。

そんな心に引っかかる感覚を抱えたまま、2017年の基調の作成に入っていく。2017年は福田先生の近畿での基調に強い影響を受けた。前年度に提案した「若い教師の苦悩」の根底には学校スタンダードや「狭量化」する学校があって、それにより教師も生徒も苦しんでいるのだと自分の中で繋がったのだ。そのことと対峙することとして、「少年期」を取り戻す実践が必要だと打ち出した。しかし、その作成の過程の中での議論の中でもこの「情緒的」に関わる指摘がまたもやあった。基調の中に出てくる「腹をくくる」という表現に対して、それは「よし、絶対に諦めずに頑張ろう」という気持ちの問題か、という指摘だった。私は上手く答えられなかった。なぜなら「腹をくくる」とは強い気持ちを持ってという意味で正に書いていたからだ。上間氏の文章からの引用で終わっているのもその強い思い、強い決意を示す意味合いだったが、ここでも、情緒的という言葉が頭に浮かんできた。また情緒だ。

そして決定的だったのは、2018年Kの世界秋号に兼田実践の分析を書いた時の批判だった。これははっきりとした批判だった。阪上さんが書いたものは分析ではなく、ただの感想だというものだった。自分としては、兼田実践を肯定的に評価をしながらも、集団作りの視点はどうかというように分析的な視点を持って書いたつもりだった。しかし、小説からの引用も多く今度は感想という受け止めにしか読む人に至らせることしか出来ていないという事実は自分にとって最大級の衝撃だった。

「情緒的」「気持ちの問題か」「これは感想だ」情緒という言葉が意味するものは何か。その答えはもはや明確だ。情緒は雰囲気のことでもある。雰囲気はムードだ。ムードは人を酔わす。この酔いは「お酒に酔う」や「乗り物に酔う」と同じで、人間は酔うと視界や思考が曇りぼやけてしまう。いつも情緒的に文章を書いているということはつまり、ぼやかしたいものが自分の中にあるということなのだ。

京生研の基調が読む教師を惹きつけるのは何故か。それは情緒豊かな上手な文章で書かれたもの、だからではない。分析の確かさから理論や大切なことを導きだし、読む者に実践の見通しを持たせることができるから、それこそ本当に基調は灯台の灯のようになって目標となり、そんな実践をしてみたいと人に思わせるから人を惹きつける。決して情緒的に訴える上手な言葉や表現があるからではない。そんな事は分かっているはずなのに、自分の書くものが情緒的になってしまうこと理由は、つまり、それしか読む人に訴える術

が私にはないからだ。分析の確かさが見せてくれる見通しが人の心を掴み動かすのに自分はその分析的な見通しが示せない。示せないから曇らそうとして情緒的なもので惹きつけようとしているのだ。

これは目を背けたくなる事実であった。この事実への到達は大きな自分自身への課題の突きつけであり、曇らせたかった自分の本当の姿だった。そんな自分がまたしても、次年度に向けた基調が書けるだろうか。そんな自分が書けるわけがないと。本当に気が重かった。

自分には分析しそれを示す力量がない。そのことを情緒で誤魔化している自分に打ちひしがれ、基調を書くことに途方にくれそうになっている最中、藤木先生が実践の分析に際して「来歴のストーリー」と「成長のストーリー」を「Kの世界」で提示された。生育歴と対他関係との交錯によってその子の背景を読み解き、内情を想像し、課題を見いだして、その後の方針を持つことのモデルを明確に示されたものだった。読んだ瞬間、直感的に「これだ」と思った。「来歴のストーリー」という分析のモデルは、見立てる力や、子どもの姿を意味づけ理解する力をつけることを目標の一つにした学びを続けてきた私たちにとって、その力さえ付ければ私たちでも描き得るものとして私には受け止められた。これならば情緒を越えられるのではと思った。

「なぜ実践家たちは子どもの側に立ちきることが出来るのだろう。折れそうな気持ちを持ち越えさせるものは何だったのか。当然そこには強い気持ちや決意があったはずだ。しかし、それは単純な感情の問題だけではない。その感情や決意を支える何かがあるはずで、私たちはその何かを見だし、それを学ばなければいつまでたっても「あの人だからできる実践だ」を越えることができない。

何なら学べるのか。気持ちや決意を支える何かを一般化した技術として表すことができれば、それならば学べるはずである。」

と基調に書いたが、これは本当に本心から出てきた言葉だ。自分の課題が基調や文章を書くことによってはっきりと自覚するに至らされた私は、情緒を越えるものとして、そして欲しかった分析力の獲得のために、この来歴のストーリーに飛びついたのだ。「見捨けない気持ち」「寄り添い続ける思い」「腹をくくる」は「来歴のストーリー」の裏付けがあって初めて成立するという発見は、情緒的な自分を越えられるかもしれないという可能性であったのだ。

今思うと、藤木先生があのタイミングで提示して下さったのは偶然ではなく情緒を越えられない自分に対しての強烈な示唆だったと本当に勝手に思っている。そう思わずにはいられないタイミングだった。

こうして昨年度の基調に至った。私にとってこの3年間は「情緒的」な自分に出会い、その出口かもしれないものを見つけることができた3年間だった。

この3年間で苦しみながら基調を書いてきた私を助けてくれたのが現研究部長の楠本先

生だ。彼は2017年基調では海田実践の分析を。2018年には兼田実践の分析を通して、基調の根幹に関わる来歴のストーリーを提示してくれた。まさに、私の課題である分析の部分を大きく担い助けてくれていたのだ。彼の分析の優れている点は、勝手な自分の、それこそ感情からくる見立てではなく、以前の実践例や学習を通して学んだ知識、理論を基に裏付けられた分析ができるところである。京生研の知の蓄積が彼にはあるのだ。そんな楠本先生が今年度から書くべくして基調を書いているのである。

基調は最初の構想と変わってくる。これは議論を通して、みんなの意見や思いを聞きながら書いていくためだ。当初、今年度基調に載せる実践としては、執筆者意外の実践が取り上げられるはずであった。しかし、楠本先生は何度目かの提案（割と初期）に自分の実践を取り上げて基調を執筆することに変更した。ここに、彼の覚悟を私は感じた。自分の実践を自分で分析することほど、難しいことはない。なぜなら、自分の実践の弱点は多かれ少なかれ実践者は自覚しているはずで、そんな実践に対してまず批判的に分析できないとならない。また、提案者として、厳しい批判に晒されることもある。単純にいうと他人の実践を分析する方が気持ち的に遙かにしやすいのだ。しかし、彼は自分の実践を自分で分析し案として提案した。能力の高が知られそうな私にはできなかったことである。まずここに彼の基調に取り組む者としての批判を恐れない覚悟が見て取れる。

飛び込みで入った中学3年生丁寧に学級作りを行っているのにも関わらず、なおたの不登校という問題の行動化や、なおたの逸脱した行動に迫り切れていない実践ではある。それは、「ゼロトレランスとスタンダード化」に実践者が知らず知らずのうちに染まってしまう中で「Kの特定」「生育史の聞き取り」「家族関係や人間関係の読み取り」が不十分で彼の苦悩や乗り越えたいものが掴み切れていないからだ。つまり「来歴のストーリー」が描けていないのである。しかし、そのことも本人は自覚して今基調に自分の実践を取り上げている。その批判も覚悟した上でだ。また福祉的自治集団の指導の筋道を打ち出そうとそていることも批判を覚悟という点で同じである。

「来歴のストーリー・成長のストーリー」と「福祉的自治集団」について書き切れるかどうか、当面の基調の課題だ。「来歴のストーリー」を描くことは技術であるが、まだまだこれは思想の段階というか、ともすれば分析の思考を助けてくれるイメージ図の域を脱していない試行錯誤中のものである。今後どう技術として確立していけるか、ひいては全国に発信していけるかが大切である。もはや「京都の実践」などご当地の冠がついていることに安寧している段階ではない。閉塞感をうち破るためにもこの共感のために分析する技術「来歴のストーリーを描く」ことを追求して行って欲しい。

なんとなくこの文章も分析のない情緒的な文章になってしまっているのは私の力量不足が故に許して頂きたい。しかし、そんな情緒を越えられない教師のために基調はあるのだとも思う。今後提案される基調が、力量の高を増やしてくれる、更なる高みを見せてくれることを私は2019年度楠本基調を読んで核心している。